

週刊新潮

1月31日号
370円



4

忘年会で「ベサメムーチョ」を歌った

「長嶋茂雄」奇跡の回復

希代の天才・長嶋茂雄（76）。そこに佇んでいるだけで周囲を明るくしてくれる。ミスタープロ野球が、脳梗塞で倒れてから9年が過ぎようとしている。そんなミスターが昨年末、「ベサメムーチョ」を歌い奇跡の回復を見せたのだ。

暮れも押し迫った12月29日、東京のホテル西洋銀座

『いつも心に太陽を』は1967年に公開された英米の合作映画だ。不良生徒や難題に立ち向かう黒人教師をS・ポワチエが好演したが、どんな時代であれ、どの国であれ、人は闇の中に一筋の光明を見出し、眩い光の中に忍び寄る不穏な影に怯える。希望と絶望、光と影が織り成す人間模様をご覧に入れよう。



ミスターの笑顔はファンのお宝

の宴会場。午後6時前、年齢も服装もバラバラで一見、何の接点もないように見える男女100人が三々五々集まっていた。彼らが待ち侘びていたのは、その日に出席されるフランス料理のフルコースではない。

出席者が丸テーブルに着席した数分後、1人の男性が現れた瞬間、会場は拍手の渦に呑み込まれた。ジャイアンツカラーのオレンジジヤケを基調としたジャケット

を着て、しっかりと足取りで中央テーブルへ向かった男。彼こそ、我がミスターその人だった。出席者によれば、

「この会は、ある企業の社長が数年前から始めた。長嶋さんを囲む忘年会」です。

芸能界からは女優の倍賞美津子さんや芸人のヨネスケさん、せんだみつおさんが出席していましたが、球界関係者の姿は見当たらなかった。ミスターは肘掛けの付いた特別な、大臣椅子に座り、周りの人と談笑しながら食事をしていました。

右手はまだ不自由なようでしたが、ミスターはあらかじめ切ったあったメインの肉料理を左手で器用に召し上がっていましたよ」

会の途中で、新人歌手の川上大輔が桂銀淑のカバー曲「ベサメムーチョ」を歌った。3番のサビの部分

に差し掛かり、舞台上から川上がマイクをミスターへ向けた時、コトは起きたのだ。

「ベサメ、ベサメ、ベサメムーチョ」

と、ミスターが何度か曲に合わせて歌ったのである。別のテーブルにいた出席者がその時を振り返る。

「長嶋さんは座ったままでしたが、大声で歌っていたので離れていてもはっきりと聞こえました。ミスターの歌声を聞いたのは初めてでしたが、後で聞いた話では、リハビリのために歌を歌っているそうですよ」

始球式で投げたい

現役時代から想定外の活躍でファンを喜ばせたミスターだが、専門家から見てもその回復力は桁外れだという。くどうちあき脳神経外科クリニックの工藤千秋院長が解説する。

「長嶋さんのタイプの脳梗塞が一番重症化しやすい。それが歌を歌えるまで回復したのは、凄いことです。」

まさに超人的な回復力といえるでしょうね」

実は、ここ2年ほどミスターは自らの肉体を苛めるかのようにリハビリに取り組んできたのだ。長嶋氏の知人がこう教えてくれた。

「長嶋さんは毎日1時間弱散歩をして、週3回はリハビリ施設へ通い、マシーンをを使って膝を上げ下げする運動をしています。彼の前でリハビリという言葉を使おうと、リハビリじゃない。筋力トレーニングだよ」と怒られるくらい。また、水を入れたコップを右手で握み、別の場所へ置くというトレーニングもしています。その甲斐あって、麻痺で衰えた右手も、今はお腹の辺りまで上がるようになったようです」

なぜ、そこまで過酷なりハビリを続けるのか。

「彼は、元気になって、始球式で投げたいんだ」と言っています（同）

ミスターは、マウンドに立つ日を夢見て今日もリハビリに励んでいる。